



連載

ビブリオ・トーク
—私のオズメー—

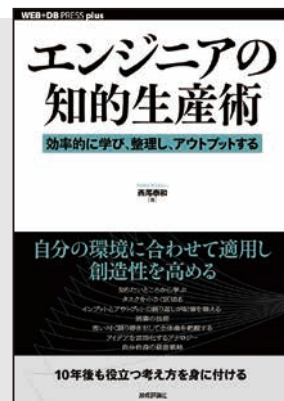
… 大見嘉弘 (東京情報大学)

エンジニアの知的生産術

— 効率的に学び、整理し、アウトプットする

西尾泰和 著

技術評論社 (2018), 272p., 2,480 円+税, ISBN : 978-4-7741-9876-7



SE がより良く働くために

個人やチームの生産性向上の研究を行っている著者が、SE（システムエンジニア）の知的生産の方法について書いた本である。大部分はエンジニア全般に通用する内容だが、本書のシリーズがコンピュータ関係ばかりであり、本書の冒頭などでプログラミングを例に挙げている個所が多いので、読者はIT関係のエンジニアに限られそうだ。

著者は、考えを整理して表現するワークショップを大学で実施したり、新たな知識の創出について講演してきた。しかし、著者が伝えたいことが1冊にまとまっている本がないので、本書を書いたそうだ。ワークショップや講演、そして著者の実践からの経験に基づく知見が本書の随所に垣間見え、「活きた」内容になっていると感じた。

以下に本書の章立てを示す。なかなか盛りだくさんな内容だ。

- 第1章 新しいことを学ぶには
- 第2章 やる気を出すには
- 第3章 記憶を鍛えるには
- 第4章 効率的に読むには
- 第5章 考えをまとめるには
- 第6章 アイデアを思い付くには
- 第7章 何を学ぶかを決めるには

本書の特徴

知的生産に関する本では、梅棹忠夫『知的生産の技術』、川喜田二郎『発想法』などが有名だが、出

版から半世紀がたち、実践の具体的方法はずいぶん古くなっている。その後、同種の本は主にビジネス書として多数出たが、その多くはハウツー本で表面的なことしか書かれていない。

また、IT分野における知的生産について書かれた本は案外少ない。Gerald M. Weinbergの著書に代表されるようなソフトウェア開発に限った本は多数出ている。しかし、その前提となる学習法や整理法、何を学ぶべきかといった根本的な事柄について書かれた本は、社会人全般を対象としたものがほとんどである。

本書はSEの視点から知的生産に関する方法論を幅広く紹介しており、さらに読者が各個人に合ったやり方にカスタマイズするように導くように書かれている。今までありそうでなかった本だと感じた。

以下では、各章の中で印象深かった内容を紹介する。

第1章 新しいことを学ぶには

学びのサイクル（情報収集、抽象化・モデル化、実践・検証）などが書かれている。この中でも、抽象化・モデル化は特に詳しく書かれている。これらは、SEにとって特に必要な能力だといえるだろう。

また、学びのサイクルを回すにも「やる気」が重要なことが書かれている。そして、やる気を維持するにはゴールの明確化が重要だとある。『『プログラミング言語 Python をマスターしよう』という目標を立てるのは、典型的なバッドパターンです。』とある。なぜなら、どこまで理解すればマスターしたことになるのか曖昧だからである。多くの人が陥



りがちな曖昧な目標設定の例で、身につまされる思いがした。

第2章 やる気を出すには

全体像の把握、タスクの設定、重要事項の優先などが書かれている。表題を見ると、やる気がある人には関係ない章に思えるが、むしろ「やる気があるのに思うように成果が出ない」人のほうが読むべき内容だと感じた。

第5章 考えをまとめるには

従来からよくある整理法や発想法で取り上げられてきた内容である。KJ法を中心に説明しているが、ふせん紙のサイズや色について、実践に基づく言及が興味深い。

いわゆるハウツー本では、KJ法はカードをグループにまとめていく、という説明しかないものが多い。しかし、KJ法は関係のあるカードどうしを線で結ぶA型図解化も特徴である。また、図が完成した後に、図を元に文章を起こすB型文章化がある。本書は、これらにも触れており、丁寧に書かれているという印象を受けた。

第7章 何を学ぶかを決めるには

本書の中で一番根源的で重要な章だと感じた。「科学と数学の正しさの違い」、「意思決定の有用性は事後的に決まる」、「他人からの知識の獲得はコストが安いが価値も低い」、「卓越か差別化か」といった興

味深い内容に触れている。特に、まだ方向性が定まっていない若い人にはぜひ読んでほしい内容である。

本書の意義と今後

第1章で述べられている抽象化は、従来であれば、大人になれば意識もせず自然に身についた能力であつたかと思う。それは、普段から読書をし、文章を数多く読むことで読解力がつき、それに伴って抽象化能力がついた、ということではなかろうか。ところが、最近は読書離れが進み、若い人の読解力の低さが問題になっている。若い人に本を読めと言っても急に読書量が増えるとは思えないので、効率良く抽象化能力が養われる読書法や訓練法が必要なのかもしれない。本書がそのヒントとなり得る。

ITが社会のさまざまなところに浸透している現在では、SEが用いる方法論も画一的ではなく、複数から適切なものを選択して活用することが必要となるだろう。複数の方法論を理解し、それらを自分なりにカスタマイズして使うという本書のやり方は、現代にマッチしていると思う。イノベーションを促すことにもなり得るし、多くのSEがより良く豊かに働くための助けとなりそうだ。

(2019年9月30日受付)

大見嘉弘（正会員） ohmi@rsch.tuis.ac.jp

1996年豊橋技術科学大学大学院工学研究科博士課程修了。博士（工学）。2013年より東京情報大学総合情報学部准教授。豊橋技術科学大学在学中にカード操作ツールKJエディタの研究に参画。